

50年ビジョン懇談会 議事録（第2回 まとめ）

日時：平成24年2月6日 PM2:00～PM5:00

場所：市役所4階402応接室

懇談会のテーマ

1. 都市間連携の必要性について
2. 日野の個性
3. 担い手

【馬場市長】

先生方にはお忙しいところ、またお寒い中、今日はちょっと雨が降ってきましたけれども、足もとの悪い中、足をお運びいただきましてありがとうございます。また前回の話し合いでも、大変すばらしい才に富む話を伺いまして、我々大変感謝をしているところでございます。これを前回はこう自由に活発にお話を幅広くやっていただきましたので、恐縮ですが、今回はこちらのほうでおおむね3つくらいに分けてみて、それで少し絞って、できれば3月17日のシンポジウムにやや具体的なその話ができるかどうかというところにちょっと結びつけていただければありがたいと思い、こういう進め方にさせていただきました。その前に、先生方のお話を伺ったうえで、わがまちはこれからどういう方向にいけばいいのかっていうことを、今の市長としての夢というか思いを抱いているかということに少し触れさせていただいて、併せて今日のこの3つのテーマに少し関る話を市長としてさせていただいて、それらを踏まえて、この3つを砕いていただくといいなと思っています。どうぞよろしくお願い申し上げます。

それです、こう哲学的っていうか心情的っていうか、日野をどうするかっていうときに、まずもっと楽しそうなまちにしたいっていうのが1つあります。今は、少し楽しさが欠けているかと。次にもっと美しいまちにしたいと思っています。美しさというと、ある程度いい面も出ているかと思いますが、もっと美しくしたい。あと3つめとして、私が一番言いたいことですが、しゃれたまちにしたいということです。少し前に、市政のテーマの中で着飾って歩きたくなるようなまち、街並みをつくろうじゃないかということを行いました。あるいは『藝術文化の薫るまち』ということも言いましたが、しゃれたという街並みがほしいということです。あと最後に、具体的なテーマの中にいずれ出てくると思うのですが、子どもがのびのびと遊び学んでいるまちでありたい

と思います。大きく言うとこれらの点が、これから日本を、日野を考えるときに、一番基本のイメージとして感じています。その際に、今何が欠けているのか、あるいは何をもっと伸ばしたほうがいいのかを考えると、その欠けている面では、商業がまったく欠けていると思います。それから観光っていう面では、結構お客様がたくさん来ているが、行政とか市民の意識の中には、日野市を観光という面で捉える人はほぼいないことです。あともう一つが、こんなに日野っていいまちなのに、堂々と日野ってこんなまちですよという人がほとんどいないことです。前回のお話でヒントを改めていただきましたが、遊び心がないなと思います。これらの点が今欠けているわがまちのポイントであると思っています。次に、得意なところというか、伸びているところ、何を活かせばいいのかということで、これもいくつか話しが出ましたが、水路とか多摩川、浅川などの川というのは、もちろんもっともっと活かしていけばいいだろうということ。それから、電車も道路も高速道路も含めて結構便利だと。この便利さっていうものをもっと活かしていてもいいのかと思います。あと、市民運動がとても盛んなまちです。たぶん、近隣よりも結構市民の皆さんが行政といっしょに物事をやったり考えたりするという割合が多いと思っています。あえていえば、民度の高さを活かしていきたい。あともう一つは、これは作られた伝統、伝説ですけど、日野は、日本全国の中小図書館は日野から始まったというくらいの図書館を持っていて、その伝統を今でも面々と続いている。こういうものをもっともっと活かしていくっていうことが必要ではないかと思っています。あと付け加えれば、大きな工場が今段々移転しようとしています、あれだけ工場がある東京都下のまちはなかなかないので、これも一つのこれから活かす素材になってくると思っています。どうすればいいかというと、私が今ハード面で思っているのは、例えば、高速道路のスマートインターチェンジをどこかにつくることと、あともうひとつが川の駅とか道の駅というのをどこかにつukれないだろうかということです。これらは、一つの賑わいの拠点や交流の拠点になるのかとったりしています。ソフト面では、やはり教育で、子どもの教育をととても一生懸命やっているし、それに適した地域を持っているということが売りになるし、それを活かしていけばいいのかと思っています。

次に、都市間連携について言えば、われわれは、どんな時代がきても東京都の日野市であり続けたいと、それは発信したほうがいいだろうと思っています。基本は、単独で日野市で末永く行ければいいと思いますが、そうすると、かなりの分野で連携をする必要があると思います。今は、ゴミはこの連携とか葬祭場はこの連携とかいろんな組み合わせがありますが、そうではなくて、もっと違った連携が仕組みなければいけないのではないかとっています。

あと担い手のことについては、やっぱり若者と女性が重要で、特に女性がもっとまちづくりに入ってもらってという仕掛けをつくるまちにしたらうまくいくのではと思っています。そうすると、三世代が近くにいる、住むとかそういう仕掛けをいろんな面で作っていかなければいけないし、職場の、職住近接の仕掛けも作っていかなければいけないと思っています。概ね、私はイメージ的に申し上げるとその辺のことを先般のお話を踏まえて描きつつあることをはじめに申し上げたいと思います。ぜひ先生方にご議論をいただければと思います。

●都市間連携の必要性について

【細野委員】

少し日野市の明日を考えるということで3つほどのデータ分析をしてきました。それをご紹介します、日野は独自でがんばりたいということが、どのくらいの可能性があるのかという話をしたいと思います。まず、人口で見ます。なぜ、人口で見るかというと3つの理由があるんです。人口っていうのは、まちの賑わいを作ってくれます。それから需要をつくってくれます。2つ目は、今度は事業所を支えます。あるいは、供給を支えます。3つ目、これが一番大事だと思っていますが、若い人たちに教育をちゃんとする。つまり、新しいまちをつくっていくというためには、やはり将来世代がちゃんと担っていかなければいけないということです。そうすると人口っていうのは、将来を作ってくれるわけです。だから、需要をつくり供給を支え、そして未来をつくるので、人口っていうのはとても大事なんです。

日野市の人口について気がかりなのは、昭和50年後半から60年くらいまでが伸び方のピークでだんだん下がってきているわけです。勢いがなくなっているんです。これは少し考慮しなければいけないことです。多摩地域は、全部2020年から2025年になると、ずっとマイナスになってしまいます。この中でどうするかという問題があります。

次に、生活保護率みたいなものを下げるにはどうするかというと、やっぱり雇用と人口の正のフィードバックというものをやはりきちんとやらなければいけないと思います。行政が民間の事業者と組むときに重要なことは、雇用機会をどうやってつくるかということだと思うので、行政側の意識を転換していくことが絶対大事だと思う。また、どうやって事業所を増やすかということが重要で、なぜかというと、事業所数が増えれ

ば増えるほど人口は増えていくし、かつ流出する率はどんどん減っていきます、という統計的に分析結果が出ているからです。日野市は、残念ながら、2005年から2008年の工場数も出荷額も両方とも下がっています。この結果は重要で、今後どういう形でやるのかということが大事になってきます。産業別の雇用吸収力の結果からみると、製造業・商業・サービス業、この3つの代表的な産業について、雇用を増やすためには事業者数を増やすことになり、行政が、事業所との連携を図っていろいろやろうっていうときにはなんでやるのかと、雇用を増やすためにやっているんだよということをはっきりさせることが重要です。要するに、企業はいい人材をたくさん取りたいと思っているし、それが地域の周りに対してプラスの影響をもたらすならば、こんないいことないわけです。その点のことを、やはりシティセールスをするときに十分に考えていただきたい。

最後に、連携っていうのが大事かということについては、要するに個性を喪失したら、合併されるか人口は減るしかないということです。没個性になるということなんです。今後は、地域間で競争して、どこも人口の取り合いをやろうとすると、やはり、成功モデルを取り入れるわけです。それは、逆にいうと個性をだんだん失くし、没個性になるということです。魅力がなくなり、それは独自でなくしてしまう。没個性になって人口の取り合いをやったら、大体どれくらいの行政の数になるのかというのを出しました。そうすると、奇妙なことに23区も多摩も大体17くらいです。人口も、今多摩地域と23区で人口は1:2なので、17の行政で両方とも23区は大体50万くらいの人口規模で均衡していて、多摩地域は25万くらいです。50万と25万ということになります。

郊外都市の二大構造でいうと、将来的には郊外住宅型よりも職住近接型のほうは伸びていきます。これはライフスタイルから見てもそうだし、公園とか緑地面積とか街並みとか景観とかがとても大事になります。また、歴史、文化、教育、それからスポーツとか医療、このあたりを考える必要があります。そうすると、どういう連携の仕方をするかっていうことを考える必要が出てきます。

最後に都市間連携の必要性ということですが、自分たちでやむを得ずこういう形にしたほうがいだろうと、そうしたら二重行政もなくなるだろうし、行政の効率化もできるし、個性的なまちづくりもできるでしょうと、そういうことが重要であると考えます。

【青山委員】

企業進出について、雇用は相当なキーワードになると思います。あらゆる社会保障から税制から賑やかさから、あらゆる面で雇用が重要です。

【陣内委員】

魅力ですとか自然とか教育レベルの高さ、そういうものが新たな良質中堅、中規模小規模の企業を引っ張ってくる大変重要なベースになる。また、数も重要だけど、質ってというか、そのカテゴリー、どういう種類の事業所を増やしたいのか、それぞれの大規模・中規模・小規模の商業、オフィス、工場など何がどういうふうにやれば出てくるのかという構造や今の資産とのマッチング、あるいはどこにゾーニングするか、どこに貼り付けるかという戦略が必要だと思います。

【細野委員】

東京は経済的には伸びてきたが、大阪はダメでした。なぜかという、重厚長大を後生大事にしたからです。東京は中小やベンチャー、ITなど様々な産業を興すことに対して力を注いできたと思います。それがおそらく良かったのでしょう。それと同じように商業についても、もう大型ショッピングセンターという、そういう時代ではないんですね。ちっちゃな店がとても大事になります。

【馬場市長】

先生も日野が工業都市であってそんなものを作っているなんて知らなかったとおっしゃいましたが、ほとんどの市民も知らない。あるいはもっと言うと、市の職員すら知らない。まずは、PRを始めて、まず知ってもらおうじゃないかと思っています。実態を見てもらって、就職したいという学生を連れてくるというか紹介するというのが行政の役割だろうと思っています。

【細野委員】

多摩というのは、昔から軍事的なところがあるので、工学とか生物とか電子部品とかそういう部門の比率が高いです。また、中堅とかいろいろ研究所もあります。そうすると、かなり最先端のことと、それからオーダーメイドのものが結びついてやっている。だから、大規模工場の移転に関連した中小企業が、ここでもやっていけるような形での優遇措置やPR等により、全国にマーケットを充実させる支援を検討する必要があると思う。

【馬場市長】

事業所が大事だとすると、事業所を守っていくというのは行政の大きな役割として持つと、担うと、そういう考え方が必要であることを改めて思います。今までは事業所の宣伝をすることは、行政の仕事ではないという考え方があったりしたが、事業所の数と雇用とまちの活性化と賑わいとみんなこう結びつくということを考えていく必要がある。

【陣内委員】

日野は大学とも交流できるし、研究所、あるいはクリエイティブな産業の場ってというのは大いに可能性があると思う。

【青山委員】

都市間連携と市町村合併の問題について話しますと、平成の大合併というのはまあ一言で言うと制度先行・理念先行・財政先行という特徴があった。要は地方交付税という都合で、特段合併しなければならない理由がなかったと思う。だから、あまりに捉われると、私は見通しを誤るとそう思う。行政の場合には、制度か政策かという論点と、財政か生活かっていう論点と、理念か現実かという論点があるわけです。そういう意味で言うと、平成の大合併というのは政策論ではなくて制度論だったのです。私はむしろ日野のエゴで考えたほうがいいので、日野のためにどうなんだということが重要であり、日野のここの政策をやるために何が問題なんだという議論がないと、つまり政策論がないといけなし、そのために制度をいじろうということはあると思う。基礎自治体というのはどっちみち必要なのですから。都道府県はいらないのです。道州制論議はやらせとけばいいのですよ。私は日野とは関係ない議論だと思います。私たちは現場で、市民生活で生きているから、市民生活の観点から議論するべきだと思う。今、ヨーロッパやアメリカでも都市再生プロジェクトが流行ったが、それによって自治体の規模を一切いじっていないですよ。在宅サービスなんか、日野市全体でなくても、たぶん地域別にやっている。だから、市町村合併というのは、ほとんど市民レベルと関係のない話になっているのです。だから、あんまりそういう合併とかの話に関わらないほうがいいと思う。

【馬場市長】

むしろ逆に、私は町会とか商店会などの地域に少し任せて、何ができるかということを考えています。

【陣内先生】

全国の合併の実例をみると、地名などが表に出なくなり、ブランド性がなくなるんです。国際的にも、地域の文化、歴史、アイデンティティ、観光、パワーなどブランド化していかないと、それを担って支えてアピールするというスタイル、人間、ここにまた若い人たちが集まってきてやろうという意欲、そういうものの全部がかき消されてしまう。それはとんでもないことです。

【細野委員】

都市間連携や合併等を考えてみても、個性というキーワードが必要だし、どういう担い手で個性を作っていくかが大事になるし、みんなつながっているわけです。こういうのをどうやって活性化するかということが、これからの日野市にとっても大事な話だと思う。

●テーマ「日野の個性」

【青山委員】

そのまちの個性とかイメージとかブランドというのは、見方を変えるとストーリー性だと思います。そのまちにどういうストーリーがあるかということです。これは、実はストーリーというのは市民の誇りだとかアイデンティティだとか一体性だとかそういう理念的な面だけじゃなく、そのストーリー性がビジネスに結びつくという面が非常に強い。ストーリーがあるだけで稼いでいる都市というのは世界にたくさんあるわけです。そうすると、日野はやっぱり新選組からいろいろつながっていくということがあると思います。それからやっぱり水です。日野市の市の面積に占める水面率というのは相当高く、まさに水都です。水路があると迷路が増えて面白いのですが、結局この前の懇談会で『歩ける』『座れる』『夜遅い』が商店会の繁栄条件だと言いましたが、歩いて楽しいまちというのが基本です。実は、ストーリー性があるとお金に結び付けていく、まちの繁栄に結び付けていくには楽しみという要素が必要です。その楽しみの内容が何かというと、エンターテインメントもあるし、アミューズメントもあるし、芸術文化もあるし、買い物とか食事もあるわけですが、現代ではやっぱり食事とか買い物とか非常に重要な要素となっています。サービス業とか商業とかのほうがずっと雇用をもたらすし、まちの繁栄に結びつくというのは、現代の成熟社会は楽しみがお金になるということと、この事業所の数の因果関係の統計にまさに現れているのだと思います。買い物とか食事、

芸術文化を含めて、お客様用にセットされたものは大体成功しない。日野市民が本当に楽しむ芸術文化を。大衆文化だが、それも一流の超一流の磨き上げられた文化、これは惜しまないということが必要だと思います。そういう意味では、日野の図書館は日本一というのは、これは大事にしていってほしいと思います。学校図書館を含めて、知的な発信をする拠点に図書館になっていくみたいな、そういう仕掛けが必要ではないかと思います。そういう文化の知的な発信拠点みたいな、そういうイメージができると、企業跡地の使い勝手にもいいのではないかと思います。

【細野委員】

エンターテインメントというのはとても大事で、施設自身がストーリーを持たせるようなことはとても大事だと思います。もう一つは、今総合特区制度というものがあるが、何らかの形で規制緩和をして、ここでやったものが全国モデルとなるようなことをやれば、それ一つ取っても行政の個性なんだと思う。私は顔が見えない行政というのはダメだと思います。

主張すべきことは主張するような行政をやっていくべきだと思う。メディアを使って。市民が愛着と誇りを持てるイメージの仕掛けづくりは、市民が声をあげるよりも、行政、特に市長が発信していくのがいいと思います。

【陣内委員】

かつて江戸から昭和の初期くらいまでは、江戸っ子というか東京人、中心で住んでいる人は楽しんでたわけです。そういうスピリットがなくなっちゃっています。今、どんどんニューカマーが入ってきて人口は上がっているが、別に都心に住んでいるメリットとか楽しみを享受しようとか思っているわけではなく、便利だとかそういうものだけなのです。それは良くないと思います。やはり、自分たちが楽しむ、本来のものを現代的に取り戻すこと、そしてそこに訪ねてきた人たちがいっしょにのっかると、あるいは、まちに人が住んでいて醸し出す生活文化や営みやまちのおしゃれさだとか、そういうもの全部が本来的な観光になるべきであると思います。江戸時代はそういう観光があった。日野もまさにそのとおりだけど、都市型とは違う。都市型と違う新しいタイプの、この地域にふさわしい、住民や市民の楽しみを追及していくとそれが外の人への発信になって、魅力があるような、あるいは観光推進するような、なにがそういう日野の住み方にこだわりながらの文化や議論が必要だと思います。例えば、アートというと難しいと思われていますが、環境の中に置いたり、楽しみながらゆっくり回ることによって、アートが体に良いと思う。そういう環境のアートというのは日野で大いにできると思う

のです。日野塾という市民といっしょになった活動を行っているが、日野に関心を持った人たちがもっともっと育っていけば、情報発信の主役というか母体になると思っています。

現代人は鉄道で移動することしか、あるいはそこからしかいけない地域しか見なくなつた。中央線をはずしてしまうと、地形が変化に富んでいたりする多摩や武蔵野の、もとの地域の骨格が浮かび上がる。

これからは、毎日が日曜日だっていう高齢化した、そういう人たちが地元で面白く歩けるとか、そういうふうなことが大変な財産になってくると思います。

都市間連携の話と結びつけると、地勢学的にあるいは地形とか歴史とか流れから見たときに、日野と東の方を見るとつながって見えていく。国分寺崖線や地形的には変化があり多摩川で断絶はするが、そういった流れでつないでみていくってというような、魅力づくりが一つあると思う。川の流れや自然の地形の性格が似ていること、そういう面で見えていくと、そういう括りでは同じ問題を抱えているわけです。農業景観を残すという問題も抱えていますし、水の循環の面白さですとか、そういうテーマ性で括るというのは大いにあると思います。

【細野委員】

日野では、農業というのも一つの重要な産業だと言っていたが、小学校の授業で、農業の体験等の活用ができないかという気がする。

工場跡地については、スマートシティなどの実験的に住まい方やエネルギー、医療、介護も含めた産業の研究開発型のことができないかと思います。

【馬場市長】

高齢化社会はみんな支えが必要ですけど、地域でやっていくという仕掛けをつくるのが大事だと思います。

【細野委員】

市民の人たちの政策提案コンテストみたいなものを少しやったほうがいいと思う。参画することは、言ったら自分たちで責任を取らなければいけませんから。

熟慮型の民主主義なんて話があって、議論することが、はじめから答え有りきではなくて、学習過程を経ていいものにしましょうということです。

【青山委員】

結果だけではなくてプロセスを重視する、時代の流れですね。

●テーマ【担い手】

【陣内委員】

いろいろな活動に関わってきた中で、いろんな方々の活動を拝見してきたわけですが、行政の条例や取り組み、マスタープランなど本当に段階をつくってきた人たち、いろんな段階で参画してきていて、いろんな市民の立場・類型があるが、その場合男性が多いです。だけど、逆にその方々が層を成して強くて、若い人たちが入りにくいということもあるような気がします。市長の話で、女性という話があったが、非常に重要です。女性は本当に新しい。もともと男性でがんばっていたようなタイプの方々っていうのは、理念的でかなり問題提起的な方が多い印象です。女性たちは、制約とかルールとかがんじがらめになっている中で、できることからやりましょうと、非常に柔軟にネットワークと活動形式をどんどん広げて楽しむと、むしろコミュニティづくりなのです。こういう観点で見ると、環境問題と農業の問題と福祉や生きがいの問題とかコミュニティとかみんなくっついているような感じがします。市民運動というのは、日本ではなかなかたくさんグループがありますが、一つの大きなところで一緒になって、目標に向かって意識をして、事を動かす力を持つのは、なかなかできないのが日本だと感じていて、それが、良さでもあり欠点だということもある。

横につながるような仕組みをあるいは舞台をつくらなければいけないと思います。総結集できるようなパワーをうまく持っていければ、相当ポテンシャルはあるはずです。それと、やはり大きな流れから言うと、アラフォーの女性たちがのびのびとアイデア豊かで、人と人とのネットワークがすごい。例えば、女子会もその一つで、これは新しいタイプのコミュニティ運動なので、そういうものがはつらつと展開するような日野市がいいと思う。また、企業論理ではうまくいかない。企業とか大組織の論理ではダメで、地元のリアリティと、根を下ろして五感を活動させ、働かせて、楽しむのです。

日野は、農業とか自然風景とか水路とかそういう大きな資産、21世紀的な資産を大切にして、ここが経済価値を生むということを見抜いてくる人たちが絶対いるはずです。これはヨーロッパの動きに似ていると思いますが、田園風景を大切にしろということがしきりに言われている。水路がいい例で、田園含めた、自然を含めた価値、そういうも

のが社会的に先進国では一番重要な価値になっていて、それは経済価値を持つということになってきている。もっともっと、農業を現代的に、農ある風景を現代的に活かすメッセージを高らかに掲げて、もう一方で、小さなおしゃれでクリエイティブなイノベティブな事業体をいっぱい持ってくると、それは表裏で絶対波長が合うのだと思う。そういう面白い環境の中で時代が来ると、外部から人が来てまちが活性化する。だから、都心にこれだけ近い、30kmちょっとのこういう都市というところに、これだけの資産・自然・水・歴史・史跡、それと新選組をどう組み合わせるかが大事になってくる。

それと学校の教育は決定的に重要だと思います。歴史とか文化とかアイデンティティとかホスピタリティとかそういうのを若いころから身につけさせていることが重要です。

日本での食育というと、あまり楽しそうではないと思います。イタリアから始まっているスローフードは楽しいです。食文化学、美食学と言ってもいいくらい料理を楽しむ文化です。本物の料理をつくるということは、健康で安全で、しかも伝統的なレシピを再発見するから、歴史・アイデンティティそのものとつながり、楽しく家族と仲間と食べるそういう文明運動です。すべて、近代が忘れ去ったようなものをもう一回取り戻そうとして、世界の人も日本の人も本当に心に響いたわけなんです。日野はまさにそういうことを手がけるのに一番いいまちだと思います。大きいものもいいことだとは絶対やめて本物でいこうということ、つまり、小さいというのが条件なんです。そこにはアイデンティティがあるわけで、みんなが誇りを持っているし、小さいことで、なんかをやろうとすればすぐに変えられる。

【青山委員】

食事一つ取っても、農業の構造的な問題や環境問題などいろんなことをそこから教えていくと、そういう教え方ができる材料はあると思います。

今アメリカでは、リーダーというのは、サーバントみたいな気持ち、そういうサービス精神がないとリーダーシップはとれないのだという理論がアメリカではすごく流行っている。

学校の先生だけじゃなくても、地域の歴史、文化、芸術、そういうのを教えられる人は、地域にいくらでもいると思います。

【細野委員】

文化は楽しい、ビジネスにつながるっていうキーワードでどんなことができるか、まちづくりにどうつながるかっていうことをこれから考えていかなければならないと思います。

【青山委員】

地域コミュニティに権限とかお金とかを渡して、環境や清掃、防犯、防災、地域福祉などのいろいろな自治体の地域に関わる仕事をやっていただくというときに、最初はモデルケースでもいいから仕組み作って育てていくといいと思います。

【馬場市長】

やはり、いい地域はそれぞれの人が持っているものをうまく表現しているというか、押さえられていると思う。

【青山委員】

日本はもっと地域コミュニティでできると思う。なぜなら、日本は宗教コミュニティとか民族コミュニティとか弱いからです。欧米だと大変だが、むしろ日本のほうが少なくとも宗教と民族を考えなくてもいいから、コミュニティ単位の地域づくりってやりやすいと思う。

【細野委員】

女性が活躍していることについて考えてみると、女性の側というのは実利的で機能的で結構うまいです。

【馬場市長】

私は、三世代が同居や近居ができやすい仕掛けをつくり、実現したら、介護費用や子育ての費用、具体的には例えば救急車の呼ぶ回数などが全然減るのではないかと考えています。

【青山委員】

今地域にいる60歳代の女性っていうのは、大体専業主婦ではなくて、どこかに勤めていたのでいろいろな資格を持っている人がすごく多い。

【馬場市長】

活躍できる場がないという理由で、高齢の女性に呼びかけをしないのは、本当にもったいないと思う。

【青山委員】

そういう人たちに、地域でNPO法人をつくってもらい、何か活動してもらうとか、仕掛けるといいと思います。

【陣内委員】

他の地域のリーダーもそうですが、男性ばかりです。日野は潜在的に、女性のパワーがいっぱいあると思う。

【馬場市長】

いっぱいあると思います。しかし、うまく入り込める仕掛けというか呼びかたというか、それができていないと思っています。

【陣内委員】

高齢の女性の中には、今までは表舞台に出ることがなかった人がいると感じるが、それは今まで引き出さないほうが悪いと思う。やはり、活躍できる華やかな場をつくらなければいけないと思います。

【青山委員】

その場合に、地域で活動するにはお金とか扱う場合もあるわけです。完全ボランティアでもいいが、やはり法人格を持たせる必要がある。そういう場合に、NPO法人格を持たせるのは簡単だが、寄付税制の恩恵を受けるにはNPO法人だけだと未だに門戸が狭い。だから行政は、寄付したらすべて減免されるような基金条例なんか一本持っているとなれば可能になる。

自治体としては、寄付をしたいという人の寄付は呼び込まないといけなくなると思う。ふるさと納税以来、自治体間の競争ですから。よそに寄付されたら自分のところの住民税が減免しなければならないので、なるべく日野市に寄付してもらうことが重要になる。そのためには、地域に寄付したいと思う、目に見える団体があることが大切である。また、日野市を通じて寄付すれば税減免になるわけですから、そういう市内の市民の活動を助成するための基金条例みたいなものを一本つくればいい訳です。

地域で活動してもらうには、結局ある程度お金がないとダメで、これを市民の税金から分けるってことがなかなかいかないと思うので、寄付税制を活用することが大事になってくる。

【細野委員】

『大学との連携について』

伺いを立てに大学に行くのではなくて、自分たちにはこういう課題があって、教材を提供するし、この課題をやることによって大学を育ててあげるよという姿勢はとても大事だと思う。大学にとっては、自治体や地域と連携していくことで、いくつかの複数の目で学生たちを育ててもらうことになるので、とても大事なことだと思う。多摩地域にある大学や教師、学生を行政や地域が育てるという気概でやっていただきたい。

【青山委員】

行政側にとって学生の関心を高めるには、結構フィールドで使ってもらうというのは、私は悪くないと思う。また、若い人の意見も大切で参考になるので、大学との交流を深めるっていうのは、すごくいいと思う。

【細野先生】

まちづくりのつなぎ役について、例えばNPOだけで連絡協議会つくろうとしてもうまくいかないので、やはり行政がネットワーキングしてあげないといけないと思う。

【馬場市長】

本当にいいリーダーというのはそこそこいて、みんなの力が一緒になればいいと思うが、なかなかうまくいかない。

【青山先生】

多分、地域の場合は、信頼性からいうと市役所が絶対いいです。ある程度は仕切る必要がある。ところが、災害救助などのボランティアの場合は、行政が直接関わらず、ボランティアに任せておいたほうがよいと思う。

【馬場市長】

まちづくりについて、いろいろ個々につくれば可能性はいっぱいあるが、ただその点が線にならないといけないと思う。特に日野の場合には、へそがないとか、核がないとかって言われていて、全体で日野の中心をこう持っていくっていう議論もかつてもなく

ったし、多分これからもないと思う。そういう中で、この点を線にし、あるいは面にしていってというのが、よほど考えていかないと難しいと、話を聞きながら感じていた。

【陣内委員】

やはり、みんなが納得しなければいけないと思う。地形とか川の流れとか古い道の流れとか、そこからベースが掘り起こして浮き上がり、それに対してどう解釈を加え、新しい仕組みをつくるかということを、みんなが納得できる筋道を辿らなければいけないと思う。

【細野委員】

点を線にと言ったが、やはり点がないような線だとまちづくりにならないので、点は必要です。だから、その点自身が輝いて、輝くからこそ結んだら相乗効果がでるんだと、こういう考え方です。

【陣内委員】

名古屋では、新しい景観の中で界隈という言葉を使った。界隈というのはなかなかいいネーミングに感じる。界隈というと、まちだけじゃなくて、漠然とした、でも点になるような、核になるようなものをイメージできる。そういう界隈やスポットみたいなものをもう少し増やさなければいけないと思う。スポットがある程度決まってつないでくれば、魅力もおのずと出てきます。

【青山委員】

観光とか歴史遺産だとかはやはり点を線にしないといけないと思うが、公共施設などはむしろ逆に、いろいろあったほうが魅力的なので、それは無理に流れができなくても構わないと思う。一点集中型よりもいいと思う。

【陣内委員】

中心がないというのは、日本の都市の根本的な特徴です。求心力よりもそれぞれのパートがそれぞれ輝いて自立性がそれなりにあるという、それが日本の都市の昔からの伝統だと思います。

【青山委員】

意識的に、まち歩きや観光資源や商店街は線でつなげることは大事です。

【細野委員】

活動の相乗効果はやはり必要です。だから、産業でも六次産業の形で線を結ぶとかがいい。

【陣内委員】

やっぱり僕らも水に関わる資産とか伝統的なものとかをやってきたが、今度は経済的な事業所とか商店街とかそういうふうな活動から見た分布図というか構造図というのを描がくべきです。

【馬場市長】

まちづくりはどうも、しっかりときれいな街並みを整備してという感じがあるが、そうではなくて、あえてうねった水路を活かし、そのの周りに何か賑わいのあるものを作ったらというのを考えている。

【陣内委員】

水のそばに飲み屋街などの賑わいができるというのは、日本の歴史的な伝統です。